

時限爆弾奇譚

——金博士シリーズ・8——

海野十三

青空文庫

1

なにを感じいたものか、世界の宝といわれる、例の科学発明王
 金博士^{きんはかせ}が、このほど上^{シャンハイ}海の新聞に、とんでもない人^{ひと}騒^{さわ}が
 せの広告を出したものである。

その広告文をここへ抄^{しょうろく}録してみよう。

全^{ゼン}世^セ界^{カイ}人^{ジン}へノ警^{ケイ}告^{コク}文^{ブン}

余^ヨスナワチ金博士は、今度ヒソカニ感ズルトコロアリテ、

永年二亘ル秘密ノ一部ヲ告白スルト共ニ、之ニサシサワリ
アル向ニ対シ警告ヲ発スル次第ナリ。抑々今回ノ告白対
象ハ、余ガ数十年以前ニ研究ニ着手シ、一先ズ完成ヲミタ
ル「長期性時限爆弾」ニ関スルモノニシテ、左記二列
挙シアル十二個ノ物件ハ、イズレモ来ル十二月二十六日
ヲ以テ、満十五年ノ時限満期ニ達スル爆弾ヲ装填シアルモ
ノニシテ、右期日以後ハ何時爆発スルヤモ計ラレズ、甚ダ危
険ニ付、心当リノ者ハ注意セラルルヨウ此段為念警告ス。

とあつて、その次行に「記」としるし、それから博士のいわゆ

る「十五年満期」の「長期性時限爆弾」を「装填シアル物件」が十二個ずらずらと列記してあるのであった。

このところまでの警告前文を、金博士め何をいいだしたやらと、
 半ば^{こうきてき}好奇的に^{ねむけ}睡氣ざまし的に、机の上に足などをあげていて、
 この記事を読んできた連中は、その次の行^{ぎよう}へいつて、大概^{たいがい}呀^あっ
 ！と大きく叫んで、その軀は椅子ごと床の上に転がったものである。

この一見ばかばかしき騒ぎは、新聞読者の余りにも周章^{あわ}てん坊^{ぼう}
 たるを証明するわけでもあるが、しかし左記の十二項を読んでい
 くと、まあそのくらい騒ぐのも無理ならぬことのようにも考えら
 れる。すなわち、まず第一号を読んでみると、

一、八角形ノ文字盤^{モジバン}ヲ有シ、其ノ下^{フリコバコ}二振子^フ函^コアル柱時計ニシテ、文字盤の裏ニ赤キ「チヨーク」ニテ3036ノ数字ヲ記^{シル}シアルモノ。

とある。

冗談じゃない。この説明にあるような柱時計は、すぐ一目で特^と異^く性^{いせい}を看破^{かんぱ}し得^えらるるような、どこにもここにもあるという物^ぶ品^{つぴん}ではないというわけではなく、そこら中^{じゆう}、どこにも至るところにぶら下っているだろうところの柱時計を指している——いや、ややこしいものの云い方である。簡単にいうと、それは極めて普

通の古い柱時計を指しているのであるから、さてこそ上は財閥ざいばつの巨頭きよとうから、下は泥坊市どろぼういちの手下てしたまでが、あわてくさつて、椅子とともに転がった次第である。

後日の調べによると、その日のうちに、租界そかいの中だけでも、三千百四の柱時計がめちやくちやに解体されたそうで、そのほか黄浦江うほこうの中へ投げこまれたものが六百何十とやらのぼったという。まことに人騒がせなことをやったものである。

しからば、柱時計を持っていけない連中は、さぞ悠々ゆうゆう自適じてきしたであろうと思うであろうが、そうでもなかった。なるほど、とうがい当該の彼および彼女は柱時計なぞを持っていけないから、自分の家または居間については安心していられるが、もし隣家となりに、この

恐るべき古い柱時計があるとしたらどうであろう。またアパートに住んでいるとして、階上うえ又は階下したの部屋に、この恐るべき柱時計めが懸つていたとしたならどうであろう。どっちの場合も、人ひととさま様のおかげをもつて、どえらい傍杖そばづえてき的被害を喰くらう虞おそれが十分に看取かんしゅされたものだから、どうして落付いていられようか。やつぱり、椅子と共に半転はんころがりとなつて、近いところから始めて、近隣ちかまの間にのこらず侵入しては、頸くびの痛くなるまで柱時計を探して廻つたことであつた。だから、租界中が、この柱時計のことだけれども、どんなに名状めいじようすべからざる混乱おちいに陥つたかは、読者が容易に想像し得らるるところにちがいない。

しかも金博士の爆発警告の物件は、この柱時計だけではないの

である。あとまだ十一個もあるのである。一々ここに書き切れないが、^{ついで}序にもうすこし述べておこう。

2

次の第二号を見ると、こんなことが書いてあった。すなわち、

二、ソノ色、^{コツカツシヨク}黒褐色ノ水甕^{ミズガメ}ニシテ、底ヲ^{サカサ}逆ニスルト、
赤キ「ペンキ」デ4084ノ数字ガ^{シル}記サレタルモノ。

さあ、たいへん。水甕は、たいていどこの家にもある。ましてや水甕の色となると、鮮^{あざや}かなる赤や青や黄などのものはなくて、たいてい黒^{くろ}ずんでいる。博士は多分その水甕を特別の二重底にし、そこに爆弾を仕かけておいたものであろうが、そうになると、どの家でもそのままにして置けない。水甕という水甕は、その場で逆さにひっくりかえされた。そのために、そこら中は水だらけと相^あ成^いり、水は集り集って、租界^{そかい}を洪^{こう}水^{すい}のように浸^{ひた}してしまった、本当の話ですよ。

空になった甕^{かめ}は、いずれも毛嫌いされて、家の中には再び入れてもらえず、一旦は公園の中に持ちこまれて、甕の山^{きざす}を築いたが、

万一この甕の山が爆発したら、あの刃物のような甕の破片が空高くうちあげられ、四方八方へ、まるで爆弾と同じ勢いで落ちてくる虞おそれがあるというので、これではならぬと、また今度は、皆して、えっさえっさと甕をかついで黄浦江こうほこうの中へ、どぶんどぶんと沈める競争が始まった。なにしろ、いくら赤いペンキで数字が書かれたとて、もう既に十五年も経過しているのであるから、とても文字の痕あとがさだかなりとは思われず、さてこそそのさわぎも大きくなつた次第しだいである。

その次に曰く、

三、丈タケが二尺グライノ花瓶カビン、口二拇指オヤユビ指ヲ置キテ指ヲ中ニサ

シ入レテ花瓶ノ内側ヲサグリ、中指ガアタルトコロニ、小サ^{チイ}
ク5098ト墨^{ボクシヨ}書シアリ。

というわけで、今度は、立派な花瓶が一つのこらず、河の中に
投げこまれてしまった。なるほど、十五年前に墨書^{すみがき}し、その後十
五年間^{びん}瓶の中に水を張ったのでは、大伴^{おおとも}の黒主^{くろぬし}の手を借らず
とも、今日5098の文字は消え失せているに違いなからう。

さて、その次は、

四、寢^{シンダイ}台。木ヲ組合ワセテ作りタル丈夫ナルモノ。台ノ
内側又ハ蒲団^{フトンワタ}綿ノ中に、朱筆^{シュヒツ}ヲ以テ6033ト記シタル

トウシヘン
唐紙片ヲ発見セラルベシ。

とほう
途方もない騒ぎとなつた。租界中の誰も彼もが、白い綿ぎれ、
ねずみいろ
鼠色の綿ぎれ、鼠の小便くさい黒綿ぎれを頭からかぶつて、
何のことはない綿祭りのような光景を呈した。

こうほう
黄浦江は、あの広い川面が、木製の寝台を浮べて一杯となり、
かわも
上る船も下る船も、完全に航路を遮断されてしまつて、船会社
や船長は、かんかんになつて怒つたが、どうすることも出来ない。
しかし乗客たちは、安全に陸に上ることが出来た。その浮かべる
寝台の上を伝い歩いて渡つた結果……。

「おい、あの金博士め、けしからんぞ」

「なんだなんだ、なぜ、博士はけしからんのか」

「わしが案ずるところによると、金博士は、豪商ごうしょうに買収されているのにちがいない」

「買収されているって。それは、なぜそうなんだい」

「だって、そうじゃないか。第一は柱時計、第二は水甕、第三は花瓶、第四は寝台というわけで、今までのところで、この租界の中に於て、この四つの品に限り全部おしやかになってしまったではないか。われわれは今夜から寝るのを見合わせるわけにも行かない。つまり寝台を新たに買い込みにやらぬ。花瓶はちよつと縁えんどおいが、水甕みづがめだつて時計だつてすぐ新しく買い込みにやらぬ。そうすると、商人は素晴らしく儲もうかるではないか。なにしろ

べら棒に沢山売れることになっていいるからなあ。それに彼奴らのことじゃから、足許あしもとを見て、うんと高く値上げするにきまつていいる。つまり、金博士は、商人に買収されて、あんな警告文を出したのにちがいないと思うが、どうだこの見解は……」

不斷ふだんから冷静を自慢していいる一人の男が、咄々とつとつとして、こんな見解をのべたのであつた。

「なるほどねえ、それは大発見だ」

と、相手の大人が手を敲たたいた。

「ね、分るだろう。だから、あの新聞広告を見て愕おどろいて、水甕を割つたり、寝台をばらばらにしたやつは、大間拔おおまぬけだということさ。だから、第五号以下、どんなことが、書き並べてあつても、

氣にすることなんか一向ないのさ」

「なるほど、なるほど。ええと第五号は、紫檀したんメイタ卓テーブル子か。

それから第六号が、拓本たくほん十卷ヲ収メタル書函しよばこか。それから：

……

と、彼は、警告文の左記列項さきれつこうを順々に読んでいつて、遂ついに最後

の項に來た。

「ええと、第十二号。礎石そせき。『エディ・ホテル』ノ礎石ナリとあ

るよ。こればかりは、所在がはつきりしているではないか。礎石

といえ、石造建物のホテルの一等下の角かどにある石のことじ

やないか。あれは南京路ナンキンロに面した町角まちかどだったな。あの礎石が、

二日のちの二十六日に大爆発を起すことになる、これはたいへ

んだ。ホテルの近所の家は、全部立ち退きのをしないと大危険だねえ」

彼は、驚駭きようがいのあまり、齒の根もあわず、がたがたと慄ふるえでしたが、そのとき咄々先生はからからと笑って、

「やあ、なにを騒ぐぞ。これも商人の儲け仕事の一つさ。つまり石材せきぎざいの値が、高くはねあがる見込みだと一般に思わせて、大儲けをしようというわけだよ。なあに、爆発なんぞしやしないよ。うっかりその手に乗るやつが大莫迦おおばかさ」

と、一いっしょう笑に附ふした。

「ああなるほど。これもやつぱり金儲け的謀略ぼうりやくだったか」

と、先生はうなずいて見せたが、しかし彼は、どういうわけか、

完全に不安の念から放れたとまではいかなかった。

3

互^{たがい}に対立した二つの見解がたしかにあつたのである。

この二つの見解は、二十四日、二十五日の両日に於て、互いに追いつ抜かれつ、その勢いを競つたのであるが、いよいよ金博士警告の爆発予定日たる二十六日の朝になると、爆発論者は勿論のこと、昨日までの不発論者たちすら、一せいに荷物をまとめて、

エディ・ホテル附近からどんどん避難を開始したのであった。大きな口をきいていた彼等さえ、やっぱり氣持がわるくなつたらしい。してみると、金博士の信用なるものは、この土地では仲々大したものであるといわなければならない。

そのころ、当の金博士はどうしていたかというのに、彼は常じょう住じゅうの地下室から、更に百メートルも下つた別室に避難し、蟄ちつき居よしてしまった。それは、二十六日の爆弾の破片から身をのが

れるためではなくて、博士が十五年前に装填そうてんした長期性時限爆弾に関して、問い合あひに殺到した官界財界その他ありとあらゆる職業部面の、概算がいさん三千人の群衆からのがれるためであつた。なにしろそういう人々は事生命財産ことに關係することだとあつて、衣

服が破れ、鼻血を出し、靴の脱げ落ちることなど一向意に介せず、文字どおり博士めがけて殺到したこととて博士がそのままこの群衆を引受けようものなら、博士はぺちゃんこになってしまつたかもしれないのである。

「やあ、皆、こつちへ戻れ、不発弾が、なに恐ろしい、戻れというのに……」

と、エディ・ホテルの前で、不発論を守つて、逃げ行く不甲斐なき民衆を呼び戻しているのは例の咄々先生であつた。

「おい、皆よく聞け。五時間や十時間先に爆発する時限爆弾ならいざ知らぬこと、一体、十五年間も先に爆発するなんてそんな、べら棒なものがあつてたまるものか。十五年すれば缶詰だつてく

さる頃だよ。ましてや金博士の手製になるあやしき爆弾が、十五年間もじつと正しき時を刻^{きざ}んで、正確なる爆発を……」

残念ながら、咄々先生の言葉は、これ以上録音することが不能の事態とは相成^{あいな}つた。なぜなれば、咄々先生の舌が、一^{いち}抹^{まつ}の煙と化してしまつたからである。もちろん舌ばかりではない、咄々先生の軀^{からだ}ごと煙となつて、空中に飛散してしまつたのであつた。咄々先生が背にしていた礎石は、正直に大爆発を遂^とげたのであつた。時刻は正に二十六日の午前九時三十分——いや、こんな時刻のことなんか、読者には一向興味の無いことであろう。それよりは、その礎石の爆発に端^{たん}を發して、かの二十五階の摩天閣^{まてんかく}たるエディ・ホテルが安定を失つて、ぐらぐらと傾^{かたむ}き始めたかと思う

と、地軸ちじくが裂けるような一大音響をたててとうとう横たおしにたおれてしまい、地上は忽ち阿鼻叫喚あびきようかんの巷ちまたと化し、土煙つちけむりと火焰えんとが、やがて租界をおし包んでしまったこと、そして礎石の爆発よりホテルの完全倒壊とうかいまで約一分十七秒を費ついしたという数字の方が、より一層読者の科学する心を刺戟しげきすることであろう。

それに引続いて、この租界では、大小三回の爆発があつた。ホテルの礎石の爆発とを合わせて、四回の爆発があつたわけだ。いずれも、それ相当の手応てごたえがあつたのであるが、ここではその詳細を一々述べている違いとまがない。ただ十二マイナス四イクオール八という算術に於て明かな如く、予想されたるあと八つの爆発は、ついにこの租界内では見聞することが出来なかつた。

そのわけは、例ののこりの爆弾装填物が、装填後十五年もたつた今日、この租界の外に搬出^{はんしゅつ}されてしまったのであるか、それとも時限器の狂いでもって、二十六日以後に爆発するのであるか、そのへんははつきりしない。いずれにしても、租界の住民たちは、二十六日が去つて一安心したものの、まだ枕を高くして睡ることは出来なかつた。そしてそれからというものは、市民たちは暗いうちに起きて、慄^{ふる}えながら戸口に佇^{たたず}み、新聞が戸袋^{とぶくろ}の間から投げ込まれると、何よりも先ず、その日の紙面に、金博士の広告文がのっているかを確認、しかるのちまた寝台にのぼって、改めてすやすやと睡りを貪^{むさぼ}るという有様^{ありさま}だった。

こうして住民は、二十九日爆弾の影に怯^{おび}え、三十日爆弾を噂し、

三十一日爆弾の有無^{うむ}を論じ、一^{ついたち}日爆弾に賭けるといふわけで、ついに金博士の時限爆弾は、住民たちの生活の中に溶けこんでしまった、という罪^{つみ}造^{つく}りな話であつた。

その間にも、金博士に、なんとかして面会のチャンスをつ^{つか}かもうとする決死的訪問客は、入れかわり立ちかわり博士の地下室に殺^{ころ}す^つに^{とう}到^{とう}したのであるが、博士は常に油断をせず、ついぞ彼等の前に姿を現したことがなかった。

しかしながら、博士も木^{ぼく}石^{せき}ではない。一週間も二週間もこんなところに籠^{ろう}城^{じょう}しているのに飽^あきてきた。

或る日、博士は瓶詰のビスケットと、瓶詰のアスパラガスとで朝飯をとりながら、ふと博士の大好きな燻^{くんせい}製もの^のことを思い出した。

「やあ、鮭^{さけ}の燻製でもいいから、ありつきたいものじやな。うちの冷蔵庫の隅に尻尾ぐらいは残っていきそうなものだ」

博士は生^{なまつば}睡^いをぐくりと呑みこみながら、秘書を呼んで冷蔵庫を探させた。

「先生、尻尾どころか、鱗^{うろこ}さえ残っていません。絶望です」

「ふーん、そうかね。ふふーん」

博士の失望落胆は大きかった。博士は、大きな頭を、しば

らくぐらぐら動かして考えていたが、

「おい、秘書よ。劉洋行へ電話をかけてみい。あそこなら、

すこしは在庫品ざいこひんがあるかもしれん」

「先生、外部への電話は、一切かけてはならないという先生の御命令でしたが、今日はかけてもいいのですか」

かねがね電話使用を禁じたのは、例の時限爆弾のことで、博士に面会しようという輩やからじょうに乗ぜられるのを恐れてのことであつた。

しかしながら、こうして燻製を想い出した今となつては、もはやそんなことをいってはいられない。幸いにも、人の噂も七十五日と

いう、そこまでは経っていないが、あれからもう三週間もすぎていることゆえ、多分もう大丈夫だろうという予想もあつて、博士は遂に電話を外へかけさせたのである。

劉洋行の店の者が、電話口に出て来た。

「はいはい、毎度ありがとうございます。こちらは劉洋行でございます」

「おお、劉洋行かね。おれは金博士じやが、なんとかして燻製ものを頒^わけてくれ。お金に糸目^{かね}はつけんからのう」

「え、燻製ものでございますか。お生憎^{あいにく}さまでございます。ちよつとこのところ、鮭も鱈^{たら}も何もかも切らしております」

「しかし、冷蔵庫の中とか、後とかを探してみたまえ。棚^{たな}のものを全部下^おろしてみたまえ。燻製ものの一尾^{いっぴき}や半尾^{はんびき}ぐらいはあ

りそんなものじゃ。とにかく金に糸目はつけん。君にもしつかりチツプを弾はずむよ」

「さあ、弱りましたな。ちよつとお待ち下さい、……ところで金博士。一体、十五年先というような長期性時限爆弾は、何の効果があるのですか」

「おや君は、いやに変な声を出すじゃないか。とにかく時限爆弾などというようなものは、長期のものほど効果が大きいのだ。たとえば一いっかい塊れんがの煉瓦じゃ。新しい煉瓦が路に落ちていれば目につくが、その煉瓦が、建物に使われて居り、既に十五年も経つて苔こけむして古ぼけているとすると、誰がそれを時限爆弾たることを発見するだろうか。その油断に乗じて、どこーんと一たび爆発す

れば、相当な損害を与えることが出来る。だから、時限爆弾は長期のものほど大いによろしいのである」

「なるほど。で、もう一つ伺^{うかが}いたいのはその、長期性時限爆弾の正味^{しょうみ}ですが、その実体はどれくらいの大きさのものでしょうか。定め^{さだ}めし、ずいぶん小さいのでしようなあ」

「時限爆弾の大きさかね。それは大きいのも小さいのもいろいろ有るがね。今まで造ったうちで極^{ごく}く小さいものというと、婦人の持つているコンパクトぐらいじゃね。わしが今覚^{おぼ}えている第8888号という時限爆弾は、金^{こん}色^{じき}燦^{さん}然^{ぜん}たるコンパクトそのものである。パウダーの下に、一切の仕掛けと爆薬とが入れてある」

「それは危険ですね。金色のコンパクトで、第8888888号でし

たね。さあ、なんとかして、その運の悪い貴婦人に警告してやらねばなるまい」

「なんだって。こら、貴様は、劉洋行かと思つていたら、いつの間にか相手が変わつていたんだな。け、怪けしからん。とうとうわたしから時限爆弾のことを聞き出し居った。ここな、卑劣漢め！」

「いや、お待ち遠さまでございました。只今倉庫中を調べましたところ……」

「なにをなにを、その手は喰わないぞ。今ごろになつて、声を元に戻しても駄目だ。け、怪げしからん」

「え、博士。もう燻製は御ごにゆうよう入用ではないのですか」

「ありやありや。はて、これはたしかに劉洋行の店員の声じや。」

待ってくれ。本物の店員君なら、電話を切らないでくれ。して、燻製があつたか」

「有りました。とつて置き、すばらしい燻製です。外ならぬ博士の御用命ですから、主人が特に倉庫を開きましてございます。それがあなた、珍味中の珍味、うわばみの燻製なんでございます」

「ええつ、蟒の燻製？」

「はい、たしか蟒です。胴のまわりが、一等太いところで二米半、メートル全長は十一米……」

「それは駄目だ。いくらわしでも、そんな長い奴を、とても一呑みには出来んぞ」

「いや、一呑みになさるには及びません。厚さが十糎センチぐらいの輪わ

切^{ぎり}になつて居りますので、お皿にのせて、ナイフとフォークで召しあがれます」

「おお、そうか。そいつは素敵だ。じゃあ、うまそうなところを一片^{きれ}、大至急届けてくれ」

博士は、電話をかけながら、ごくりと生唾^{なまつば}をのみこんだ。

5

それから一時間ばかりして、待望^{うわば}の鱗^みの燻^{くん}製^{せい}が、金博士^ちの地

下邸^{かてい}へ届けられた。

秘書が、そのことを博士に知らせにやってきた。

「うふふん。お前の知らせを待つまでもなく燻製をもつてきたことは、ちゃんと知っておるわい。それよりも、早く卓^{テーブル}子のうえに皿やフオークを出して、すぐ喰べられるようにしてくれ。ぐずぐずしていると、おれは気に変になりそうじゃからのう」

博士が燻製にあこがれること、実に、旱^{かんてん}天^{じう}が慈雨を待つ^{ひっこ}の想いであつた。秘書は、びっくりして、引込んだ。

「とうとうありついたぞ、燻製に！ 燻製の鱗——鱗は、ちよつと膚^{はだ}が合わないような気もするが、しかし喰つてみれば、案外うまいものかもしれない。そうだ。時局^{じきよく}柄^{がら}、贅^{ぜい}沢^{たく}はいわないこ

とじゃ。それにしても、あの秘書め、何をぐずぐずしているのじやろう」

カーテンの向うから、秘書の咳せきばら払いが聞えた。

「おほん、食事の御用意が整ととのいましたでございます」

「おお、待ちかねた。今、そこへ行くぞ」

食事の用意が出来たと聞いた途端とたんに、博士はまるで条件反射の実験台の犬のように、どうと口中に湧わき出でた唾液だえきを持てあましながら、半ば夢中なかになつて隣室へ駆け込んだ。

「いやあ、これは偉大だなあ！」

卓子テーブルに並べられた大皿を見て、博士はまず驚き愕ようたんの声を放はなつた。そうでもあろう。胴のまわり一米三メートル、厚さ十糎センチというでか

い鱗の胴を輪切りにした燻製が、常例^{じょうれい}ビフテキに使っていた特大皿から、はみ出しそうになっているのである。

博士は、椅子にかけるのも待ち遠しく、ナイフとフォークとを取り上げて皿の中をのぞきこみながら、

「うふふん。どうもこの燻製の肉の色がすこし気に入らぬわい。

こんなに黝^{くす}んでいるやつは、肉が硬くていかん。こいつはきつと、煙っぽくて、喰っている間に、咽喉^{いんこう}加答児^{カタル}を起こすかもしれんぞ」

こと燻製ものについては、博士は仲々くわしいのであった。

ちやりんちやりんナイフを磨^とぐ音がした。博士はナイフをひらめかしてぐざりと燻製肉の一片^{きれ}を切り取り、口の中へ放り込んだ。

「いかがでございますな、お味のところは……」

秘書が心配そうに聞いた。もしこれが博士の気に入らなないと、博士はまた八つ当りの体^{てい}たらくとなり、大暴れに暴れまわるに相違ないからであつた。

「うん、どうも脂^{あぶら}がつよすぎるようじゃ」

博士は、やや物足りない顔である。

そういうときは氣をつけないと、突然博士は怒つて乱暴を始め、^{おそ}る虞れがある。秘書はここで博士の機嫌を損じては大変だと思い、なんとか博士の注意力を他^そへ外^そらせたいものと考え、

「ええ博士、さつきお電話を^{はいちよう}拝聴していますと、劉洋行とお

話の途中に、何者かお電話を横取りにした者があつたようでございますな」

「うん、あれか。あれは、後で気がついたが、シンガポールそうと総督くの声じゃった——ううん、もうすこし味が何とかならんものか……」

「で、その何でありますか、そうそう、あの電話中に、長期性時限爆弾の大きさについてのお話がありましたが、極く小なるものしょうに至ってはコンパクトぐらいだそうで……」

「そうだよ。どうもこの味がもう一步……」

「そこで、何でございますなあ、そのコンパクト型爆弾で、純じゆん金きんでもってお作りになったものがありましたそうで……」

「あつたよ。すばらしい出来のもので、南京路ナンキンロの飾窓ウインドに出ているのを有名なアフリカ探検家ドルセット侯爵夫人が上海土シャンハイみや

産^げとして買って持っていたことを、わしは今でも憶えている。

あつそうだそうだ、あはははは、これはおかしい」

博士はとつぜん、からからと笑い出した。秘書はびくりした。博士が鱗などを喰べるものだから、はげしくのぼせあがって、気が変になったのかと思ったからだ。

「ど、どうなさいました」

「いや、思い出したよ。あのコンパクトに仕掛けて置いた時限爆弾は今日が十五年満期となるのじゃ。だから、それ、愉快じゃないか。あの侯爵夫人がジャングルの中かどこかであるコンパクトを出して皺^{しわ}だらけの顔を何とかして綺麗にしようと、夢中になって、鼻のあたまをポンポンと叩いている。途端^{とたん}にコンパクトが、

どこーンと爆発してよ、侯爵夫人の顔が台なしになってしまう。
ふふふ、考えてみても滑稽こっけいなことじゃ」

「なるほど、それは一大事でございますなあ。もう電報を出しても間に合いませんでございましょうな」

「今からでは電報はもう……」といいかけて何かを思い出したという風にしばらく口を閉じて、頭を傾かたむけ「ああそうだ。思い出たぞ。あのドルセット侯爵夫人は、今はこの世に居ないぞ」

「えっ、侯爵夫人は亡くなられたのでございますか。するとかの時限爆弾が早期そうきに爆裂ばくれついたしまして……」

「ちがうよ。爆弾の時限性については、あくまで正確なることを保証する。侯爵夫人は爆死せられたのではなく、アフリカ探検中、

蟒に吞まれてしまつて、悲惨な最期を遂げられたのじゃ」

「あれつ、蟒に吞まれて……」

秘書は、ぎよつとして、金博士の皿にのっている燻製の胴切り

蟒に目を走らせた。肉は、まだほんのちよつぴり博士の口に入つ

たばかりであつたが、その切り取つた腹腔のところから、なに

やら異様に燦然たる黄金色のものが光つてみえるではない

か。それを見た瞬間、秘書は蟒が腹の中に金の入れ歯をしている

のかと思つたが、次の瞬間、彼の脳髓の中に電光の如きものが一

閃して、途端に驚天動地的真相を悟つた。そこで彼は、

きやつと一声、悲鳴をそこに残すと、気が変になつたように室外

に飛び出し、階段を三段ずつ一ぺんに駆けあがりつつ一米でも遠

くへ遁がれようと努力した。

「なんじや、秘書のやつ、急に周章あわてくさつて……」

といいながら、博士が蟒の肉にフオークをぐさりと立てると、肉の間からにゅつと黄金のコンパクトが滑り出した。しかもその表には、KDと、あきらかにドルセット侯爵夫人の頭文字かしらもじがうつてあるのさえ見えた。その刹那せつな、博士の顔が絶望に木枯こがらしの中の破れ堤灯ちようちんのように歪んだ。……

秘書が階段の途中で大爆音だいばくおんを耳にしたのは、実にその次の瞬間のことであつた。ああ偉大なる発明王金博士も、因果いんがはめぐる小車のそれで、自ら仕掛けた長期性時限爆弾の炸裂のために、ついに一命を喪つたのではないかと思うのであるが、果してそう

であろうか、どうじやろうか。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年12月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

時限爆弾奇譚

——金博士シリーズ・8——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>